

(A:目標を上回った B:ほぼ目標どおり C:目標を下回った)

	分掌	具体的取組・実践	今年度の達成基準	中間達成状況	評価	最終達成状況	評価	総合評価	次年度への課題および改善方策
1 確かな学力の育成と研究	教務 ①	・各教科から観点別評価の実施状況と実施にあたっての課題を把握し、より実態に合った評価方法の検討・改善を進める。	・1学期終了後から中間期までの間に教育課程委員会を実施し、観点別評価の実施状況と実施にあたっての課題を把握する。 ・年度末までに複数回教育課程委員会を開催し、より実態に合った評価方法に改善される。	・教育課程委員会は10月に開催予定である。1学期に実施された観点別評価の状況はまとめており、概ねこれまでの実施方法と大きな相違はなかった。今後、各教科に対し評価の場面や方法、頻度等について詳しい状況把握を依頼する。	B	・教育課程委員会は1月までに計5回開催した。委員会では各教科から聞き取った評価の場面や方法、頻度等について詳しい状況をまとめ、その資料を基に協議・情報共有を図った。他教科での取り組みを参考に、今後各教科でのよりよい評価につなげられるよう継続的な取り組みを依頼した。	A	B	・教育課程委員会では評価方法にとどまらず次年度以降の教育課程についても協議を重ねてきた。学習指導要領の次期改訂を見据え、再び評価方法の変更の可能性もあることから、情報収集を重ねながら事前に検討を重ねていく必要がある。
	進路 ②	・模試や実力考査において目標設定と振り返りを促し、目的意識を高めるとともに、自らの課題の改善に向けて主体的に取り組めるようにする。 ・1, 2年次の実力考査では出題範囲を提示し、生徒が見通しを持って学習計画を立てやすくする。 ・年次集会、進路講演会、授業等を通して学習の意義や目的を系統的に伝える。	・模試や実力考査の後に、自分で立てた目標と結果を振り返り、次を取るべき具体的な取り組みを考えられるようにするために、統一した振り返りの体制を構築した。 ・実力考査の出題範囲を提示することにより学習の見通しが立ち、「計画的に学習できた」と感じる生徒の割合がアンケートの結果から80%以上である。 ・講演会後の振り返りに関して、学習の意義に対する自分なりの考えや新たな気づきを記述し、学びにつなげている生徒が80%以上である。	・模試や実力考査においては、全年次で共通の振り返りシートを作成し、考査への取り組みと結果の振り返りができるように、その体制を構築した。 ・1, 2年次では出題範囲や学習のアドバイスを事前に提示し、生徒が見通しをもって学習計画を立てやすいように工夫している。今後は第3回の考査後にアンケートを実施し、生徒が「計画的に学習できた」と感じている割合を把握する予定である。 ・11月に予定されている2年次対象の進路講演会で、振り返りを全員に実施し、アンケートによる把握を行う予定である。	B	・模試や実力考査後に振り返りの時間に関するアンケートでは全年次で約75%の生徒が「有意義だった」と回答した。一方で、感想を通して、課題も見られ、今後の見直しが必要である。 ・実力考査に向けて出題範囲やアドバイスを提示したが、「計画的に学習できた」と回答した生徒は54%にとどまった。特に第3回では校外模試や英検の時期とも重なり、課題や予習の負担、学習開始の遅れなどが要因として挙げられる。今後は実施時期や学習計画の指導の工夫が課題である。 ・進路講演会後の振り返りには、将来や進路、学校生活に対する前向きな考えや気づきが多く記述されており、講師の話が心に届いていることが確認できた。数値としては80%以上とは示せないものの、ほとんどの生徒が学習の意義を自分なりに捉え、意識の向上が見られた。	B		・模試や実力考査後の振り返りを、学習改善につなげるため、内容や進め方の工夫が必要である。また、計画的な学習が十分に定着していないことから、実施時期を考慮した無理のない学習計画の立て方について、具体的な指導を行うことが課題である。
	ICT 支援 ③	・授業等でのICT機器の活用が円滑に進められるよう関連機器の整備、管理を行う。 ・授業力向上委員会と連携し、ICT機器の活用事例を収集し、周知に務める。	・学校評価アンケートで「1人1台端末の活用」という項目の生徒の肯定的回答が95%を上回る。(昨年度93.8%) ・ICT機器の活用に関する研修に参加し、その成果を校内に共有し、活用状況が活性化した。	・職員会議において、LEAFシステム、生成AIに関する研修会にそれぞれ参加した教員による報告会を行い、研修内容を紹介した。 ・学校評価アンケートは今後実施予定である。	B	・学校評価アンケートで「1人1台端末の活用」という項目の生徒の肯定的回答は94.9%となり、当初目標の95%をおおむね達成できた。 ・学校評価アンケートで「1人1台端末の活用」という項目の教職員の肯定的回答が昨年度より上昇しており、ICT活用が前進していると判断できる。	A		・学校評価アンケートでの肯定的回答を年次別に比較すると、2年次生が特に高い一方で1年次生が最も低くなっており、年次間及び教科内での活用方法の共有、普及が望まれる。 ・ICT関連技術は日々の進歩、変化が大きいため、継続した情報収集と普及に向けた取り組みが必要である。
	授業力 ① ③	・OJTチームを作り、自分の授業を振り返り、何を重点的に取組むかテーマを決める。 ・6月と11月の授業研究月間においてOJTチーム、教科で互いに授業を参観し合い、振り返りを行う。	・3人のOJTチームで6月の授業公開週間に自分以外の2人の授業を教員全員が参観し、意見交換できた。 ・11月の授業公開週間に教科でテーマを決めて授業を行い、学校評価アンケートの「私は、生徒が積極的な姿勢で参加し、主体的に学習に取り組める授業を行っている。」という教職員の項目で「判断できない」が昨年度の数値(11.1%)を下回り、肯定的回答が昨年度の数値(88.9%)を上回る。	・OJTチームを作り昨年の自分の授業の振り返りと今年の改善ポイントは3人で共有し全員から提出があった。 ・6月の授業公開では全員の参観には至らなかったが、活発なグループはお互いに授業を見合せて授業改善に努めた。 ・授業アンケートと振り返りの実施率をもっと上げる等まだ授業改善の余地がある。 ・11月は教科で必ず誰かの授業を参観し、授業力の向上に向けて、委員会として中心となって働きかける。	C	・11月の後期授業研究月間では、教科で必ず誰かの授業を参観し、研究協議を行い、職員会議で各教科より発表することにしたところ、各教科で工夫して実施している様子が伺え、職員室内で参観した授業について語り合う姿が見られた。また提出されたコメントは延べ54枚だった。 ・学校評価アンケートの結果は「判断できない」が昨年度の数値(11.1%)を下回り8.6%となったが、肯定的回答が昨年度の数値(88.9%)をやや下回り、86.2%だった。	B		・授業改善に、これでよい、というものはないので、引き続き、学校全体で授業の改善に努める教員集団になるように委員会として働きかける必要がある。 ・新しい取組や興味深い取組を行っている授業をお互いに紹介し合い、話し合える機会や、OJTでの活動がやりやすくなるように、どんな学びがあったか、どんな効果があったかを振り返り、共有する機会を作る。(職員会議、研修など) ・普段から授業について気軽に話せる雰囲気を目指す。
2 「ともに学びともに伸びる 古城池」を目指した人間力の育成	生徒 ①	・生徒会を中心に生徒主体で校内ルールの見直しに取りくむなど、主体的な行動のとれる生徒を育成する。 ・部顧問会議を開き、部活動と学習の両立を実践できるように、効率の良い練習の工夫と学習時間の確保をすることを確認する。	・学校評価アンケートの「行事に熱心に取り組む、充実した学校生活を送っている」という項目の生徒の肯定的回答が95%以上となる(昨年度95.6%) ・学校評価アンケートの「私は勉強と部活動の両立を目指し努力している」という項目の生徒の肯定的回答が昨年度並みとなる。(昨年度83.3%)	・生徒会や各種委員会を中心に校則等について考える機会を設けるよう生徒指導係を中心に検討している。部顧問会議において、効率の良い練習と学習時間の確保で、文武両道を実践できる環境作りを呼びかけた。 ・学校評価アンケートは11月に集計予定。	B	・少しづつではあるが、生徒が主体的に校則等について考える体制ができつつある。学校評価アンケートの「行事に熱心に取り組む、充実した学校生活を送っている」という項目の生徒の肯定的回答が96.6%、「私は勉強と部活動の両立を目指し努力している」という項目の生徒の肯定的回答が84.5%であった。	B	・高いレベルでの文武両道の実践を目指し、部顧問会議において、効率の良い練習と学習時間の確保を呼びかける他、学校と家庭が協力しあえるよう保護者懇談の機会等を利用して家庭との連絡を密にしていきたい。	
	進路 ②	・6月までに探究活動の引継ぎ会や地域連携に関する講話を通して、目的や意義への理解を深められるようにする。 ・年次の計画に沿ってテーマを設定・研究・考察を進め、得られた成果を校内外で発表する機会を通じて、生徒が主体性や表現力を育めるようにする。	・引継ぎ会や講話の振り返りに関して、活動の目的や意義に対する自分なりの気づきを振り返りシートを通して確認できる。 ・探究活動の発表後に実施したアンケートの結果から、自分の考えを伝えることができたと感じている生徒や、主体的に学んだことや今後の課題について適切に自己分析ができている生徒の割合が80%以上である。 ・学校評価アンケートの「KTは、将来を見据えた進路選択のために役立っている」の項目で生徒の肯定的な回答が昨年度並みを維持する。(昨年度86.3%)	・6月までに行われた引き継ぎ会や倉敷市まちづくり講演会を通して、生徒は活動の目的や意義をきちんと理解し、振り返りシートを通して各自の気づきを確認できた。 ・今後予定される探究活動発表会では、これまでの学びをまとめ、表現する経験を重ねることで、主体性や表現力の伸長につながることを期待される。発表後のアンケート結果をもとに、達成状況を具体的に確認していく。	B	・引継ぎ会や講演会を通して活動の目的や意義を理解する取組は一定の成果を上げており、進路選択に役立っているという高い評価も得られている。次年度は、こうした学びをさらに深めるため、探究活動の発表や振り返りの機会を充実させ、生徒が自分の考えや学びをより主体的に言語化できるよう支援していく。その過程をアンケート等で丁寧に把握することで、学びの成果を可視化し、探究活動の質の向上につなげていく。	A		
	図書 総務 ③	・図書館及び図書資料等を利用しやすい環境を整え、生徒・教職員の読書活動を推進することにより、生徒の学習や進路実現、豊かな心の育成に貢献する。	・教科やKT、小論文等に関する展示を学期に1回以上行う。 ・年2回の昼読の時期に併せて、生徒の興味関心を高めるポップやコーナー作りを行う。 ・上記の取り組み等により、年間貸出冊数、7,000冊以上を達成する。	・1学期には昼読を1回行った。図書館大賞のポップ展示も行った。 ・小論文等入試関連本のコーナー作成や、昨年度のKT発表に関する展示を行っている。	B	・12月末時点での貸出冊数は4,985冊であり、年度末での目標7,000冊達成はやや厳しい。しかし昨年度同時期より約500冊増加しており、取り組みの成果がみられる。授業内容とリンクしたコーナー作りや図書館に関するKTの成果の掲示、昼読等の取り組みも予定通り実施し、興味を示す生徒も多かった。図書館大賞で募集したキャッチコピー部門の作品の内1点が、啓文社主催「第30回日本一短い感想文コンクール」で入賞した。	B	・全生徒がChromebookを所持するようになった影響もあり、貸出冊数は伸び悩みであるが、様々な形で生徒の学習や進路実現、豊かな心の育成に貢献する、より利用しやすい図書館作りを進めていきたい。	
	教務 ④	・国際フォーラム等への参加を促し、実体験から国際感覚を身につける支援をする。 ・オーストラリア研修の説明会を2回実施し、渡航に向けた準備がスムーズに行えるようにする。また、事前研修を7程度行い、研修へ向けての語学力向上や異文化理解を促進する。	・国際フォーラム等へ1組以上が参加する。 ・事前研修アンケートで「異文化理解が深まった」「英語の学習への意欲が高まった」等の肯定的回答が75%を超える。	・国際フォーラム等への参加については、数名の希望は出ている。今後に期待したい。 ・オーストラリア研修は生徒対象の説明会を1回実施した。今後、保護者も交えた説明会を予定している。事前研修についても今後実施予定である。	B	・国際フォーラム等への参加については、数名の希望は出ているものの1月現在参加できていない。 ・オーストラリア研修は生徒対象の説明会を3回実施した。事前研修については回数を3回に減らしたが、対面に変更したことで生徒の取り組み状況は積極性が見られ効果が高かったと考えられる。 ・事前研修アンケートの結果は「異文化理解が深まった」88.9%、「英語の学習への意欲が高まった」96.3%であった。	B	・国際フォーラム等への参加を促す取り組みの検討や、個人的に参加している生徒がいる可能性もあることから、その把握方法も検討していきたい。 ・アンケートの結果は来年度の研修に活かすとともに、来年度実施の研修との比較に活用する。	

(A:目標を上回った B:ほぼ目標どおり C:目標を下回った)

	分掌	具体的取組・実践	今年度の達成基準	中間達成状況	評価	最終達成状況	評価	総合評価	次年度への課題および改善方策
3 安全・安心な学習環境と魅力発信	生徒 ①②	・交通安全LHRの振り返りをするなど、交通安全意識を醸成する。 ・交通事故の多い1年次生に対し、早期に交通安全講習会を実施する。また、4月に登下校指導を徹底することで交通事故を減らす。	・研修等の成果を教員間で共有するなど、外部機関との連携を図る。 ・年間交通事故件数が、25件以下になる。(昨年度は31件)	・年度当初に1年次生対象の交通安全講習会を実施した。4、5月の事故件数は6(10)件と前年度より減少したが、6月以降やや増加した。9月末までの件数は16(19)件である。2学期には交通LHRで自転車の正しい乗り方について指導を行い、外部機関と連携し振り返りも行った。今後も継続的な指導が必要である。 ※( )は前年度の数値。	B	・発生件数は昨年の24件に対し、現時点(1/28現在)で29件と昨年同期よりも若干増加しているが、年間の発生件数は例年30件弱で推移している。外部からの交通マナーに関する苦情電話は昨年度より若干減少している。	B	A	・来年度も計画的に交通安全教室を実施し、交通ルールの厳守、マナーについての啓発を継続していきたい。学校周辺での交通マナーに関する苦情に対しては、毎朝、教員が正門に立ったり、生徒へのよびかけを行ったりした成果もあると思われるので継続していきたい。令和8年4月1日からはじまる「自転車の交通反則通告制度(青切符)」についても周知、徹底していく必要がある。
	生徒支援 ①②	・「学校環境適応感尺度(アセス)」や「学校生活アンケート」を実施し、その結果を学年、係で情報共有し、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携して生徒支援にあたる。 ・相談室を生徒にとって居心地のよい空間になるよう整備し、相談しやすい環境をつくる。	学校評価アンケートで「悩み等を相談することのできる相談室や、スクールカウンセラーによる相談体制があることを知っている」という項目で生徒、保護者の回答が80%以上になる。	・6月に「学校環境適応感尺度(アセス)」と「学校生活アンケート」を実施した。「アセス」の結果は各担任に渡し、生徒の状況把握と対応の一助としている。気になる生徒で話を聞くことが出来る生徒には係が話を聞いている。「教育相談」はその都度、生徒・保護者に案内を出し、毎回2～3名の相談希望者がいる。	A	・学校評価アンケートで「悩み等を相談することのできる相談室や、スクールカウンセラーによる相談体制があることを知っている」という項目で生徒、保護者の回答が85%以上であり、年度当初の設定基準の80%以上を達成している。 ・スクールカウンセラーによる教育相談は継続的に相談している生徒や保護者も多く、悩み解決の一助となっている。	A		・来年度も今年度と同様程度の相談機会を設定し、外部機関等と連携しながら生徒・保護者を支援していきたい。生徒向けの講演会を「こころの健康」をテーマに、生徒自身が不安やストレスに向き合い、自己回復力を身につけられるような内容で実施したい。
	厚生 ③	・日常より災害に対する備えの大切さを意識づける。また、保護者には、災害時の生徒引き渡しについて説明を行う。 ・通常の火災・地震時の避難訓練の他、南海トラフ地震により予想される甚大な地震・津波発生時の校外への避難場所、経路を確認する訓練を行い、緊急時の冷静的確な行動力を養う。	・各地で大きな地震が発生した時、身近などで発生した場合の対処の仕方をそれぞれが意識できるようにSHR時などで確認させる。また、保護者が集まる機会に引き渡しについて簡単に説明を行う。 ・学校アンケートでの「避難訓練や防災講話は防災等に対する意識の向上に役立っている」という項目の教職員の肯定的回答が80%を超える。	・実際にカムチャッカ半島沖地震が発生し津波警報が発令されたときに、校内放送が流れるまで冷静に対処することができていた。 ・雷注意報発令時に、部活動や下校する生徒への避難の指示を出す判断が難しく、校内で共通理解を図る必要がある。	B	・カムチャッカ半島沖地震で津波警報が発令されたときも鳥取県が震源の地震発生時にも冷静に対応でき、校内放送の指示に従って避難もできていた。日頃から災害に対して意識することができていた結果だと思う。 ・雷注意報発令時に、部活動や下校する生徒への避難の指示を出す判断が難しく、校内で共通理解を図る必要がある。 ・学校アンケートでの「避難訓練や防災講話は防災等に対する意識の向上に役立っている」という項目の教職員の肯定的な回答が92.5%であった。	A		・来年度も、定期的に避難訓練を実施し、可能ならばより実践的な訓練の実施を計画できればと思う。余り不安を煽ることは好ましくないが、実際に身近で災害も起きており、いざという時の心構えはきちんと持つように指導を続けて行くことは必要だと思う。
	図書総務 ④	・中学生や保護者の満足度の高いオープンスクールや学校説明会などを実施する。また、中学生や保護者が本校に求めることを把握する。 ・生徒目線の広報活動を支援する。	・オープンスクールのアンケートで「古城池高校の特徴が理解できたか」についての肯定的回答が昨年度並となる。(昨年度99%) ・オープンスクールや学校説明会のアンケート項目に、中学生や保護者が本校に求めることを把握するための項目を入れる。 ・生徒広報委員による、広報活動を学期に1回以上行う。	・オープンスクールのアンケートでの左記項目の肯定的回答は、昨年度並(99%)であった。 ・オープンスクールアンケートの記述回答欄を改良した。昨年度に比べて具体的かつ多くの記述回答が寄せられ、中学生や保護者のニーズを把握するための貴重な意見を収集できた。 ・今年度は秋のオープンスクールで、1年広報委員による学校案内を実施した。皆積極的に取り組み、工夫を凝らした説明を行い、参加者にも好評であった。	A	・オープンスクールのアンケートでの左記項目の肯定的回答は、昨年度並(99%)であった。 ・11月の学校説明会では、新たに卒業生による説明を取り入れ、参加した中学生及び保護者にも大変好評であった。秋のオープンスクールでの生徒による学校案内や全体会の代表生徒によるパネルディスカッションも含め、今まで以上に生徒を前面に出すことで、本校へ入学後の姿をイメージでき、学校の魅力のアピールに繋がったと考える。 ・広報委員も広報紙等を定期的に発信した。	A		・オープンスクールや学校説明会では、今年度の取り組みを来年度に生かし、今年度同様生徒を前面に出すことで、本校の魅力のアピールに繋げていく。 ・オープンスクールや学校説明会での参加者アンケートを基に、より本校の魅力を伝えられるよう工夫していく。 ・私立高校無償化の影響にも注視しながら、本校の魅力のアピールに取り組んでいく。
4 働き方改革の推進	教務 ①	・各種フォルダ・ファイルの保存場所等を再構築し、効率よい業務を目指す。また、各係の業務内容を整理し、マニュアル化等を進めることで平準化・省力化を図る。 ・上記取り組みによって生じる時間を生徒の学習支援充実に充てる。	・中間期までにネットワーク内の各種フォルダ・ファイルデータを整理する。 ・最終期までに可能な限りマニュアル化をすすめ、次年度の準備や引き継ぎをスムーズにできるようにする。	・各種フォルダ・ファイル・データの整理は進んでいる。しかし、まだ文書データが整っていないかったり、これから作成される文書データもあつたりするため、引き続き整理を続けていく。	B	・各種フォルダ・ファイル・データの整理は進んでいるが、枠組みを変更したりしたことにより煩雑になっている部分もある。引き続き生徒を続けていく。 ・マニュアル化については各分掌において改善を重ねているが、まだまだ整理をする必要がある。	B	B	・業務の精選と効率化を図るため、種類が多数ある資料をまとめたり、内容が多岐にわたる資料は簡潔にまとめたりし、業務のマニュアル化もさらに推し進めていく。 ・あわせて各種フォルダ・ファイル・データの整理も進め、次年度の準備や引き継ぎをスムーズに行い体制づくりをして、働き方改革を推進していきたい。
	生徒 ①	・各係ごとに主任、副主任を中心に業務の分担化を図り、学校行事や部活動の運営を活性化できるようにする。	・課会議を定期的に開催し、課長、主任、各係主任の連携を密にする。 ・各係の業務を複数名で担当できる体制を築いていく。	・定期的な会議の開催で課内で問題点や課題の共有ができるようになった。生徒会係や交通係など複数の教員で業務を分担することができるようになっていく。	B	・定期的な会議の開催で課内で問題点や課題の共有ができるようになった。各係で複数の教員で業務を分担することができるようになっていく。業務内容によってはマニュアルの作成もできた。	B		・来年度以降も課内での報告・連絡・相談を徹底し、他分掌との連携を緊密にしていく必要がある。業務の引継ぎ等が図れるよう、マニュアル化をより進めていく必要がある。
	進路 ①	・進路行事について生徒と教員の研修を兼ねて外部委託を検討することで、指導の重点化を図る。 ・各年次の進路行事を進路課で計画・統括する。また講演会や講座、ガイダンス等の実施について整理・統一する。	・2学期期までに外部委託する行事の見直しを立てる。 ・各進路行事の実施時期と内容を十分検討し、教育的効果と業務効率を考慮した計画を立案する。	・進路行事について、外部委託する行事についての可能性をこれから検討していく段階である。 ・各年次の進路行事や講演会についても、年間を通して時期や内容を検討しているところである。各年次の実情や教育的効果を踏まえながら、さらに検討を深めていく。	B	・進路行事については、外部委託を含めた実施形態について検討を重ね、行事の見直しを立てることができた。また、各年次の進路行事や講演会についても、年間を通して時期や内容の整理を行い、各年次の実情や教育的効果を考慮した計画の方向性を明確にすることができた。	B		・進路行事を計画実施していく上では、年次との連携をしっかりとっていく必要がある。 ・進路関係の行事において、教育的効果を損なわない範囲で外部委託を活用し、教職員の負担軽減を図る。 ・特定の時期や担当者に業務が集中しないよう、役割分担を明確にする。
	図書総務 ①	・各業務を複数人で分担しやすいようにし、業務の偏りを避ける。 ・次年度の課の活性化・効率化のため、各行事(業務)終了後、複数の担当者で業務の振り返りや見直しを行う。	・各行事終了後に各係で業務マニュアルの修正・整理を行う。年度末までに課全体で確認を行い、次年度以降の引き継ぎに生かしていく。	・年2回のオープンスクールは無事終了した。特に秋のオープンスクールでは、昨年度よりも在校生を前面に出したものに更新して実施した。今後課内で十分検証・振り返りを行い、次年度に向けて見直しと業務マニュアルの修正を行っていく。	B	・月1回の課会の実施により、次の業務の確認や、行事ごとの反省・振り返りをスムーズに行うことができた。年度末に向けて年間を通して、改めて各行事や業務の振り返りを行うため、入力シートの作成等の準備を行った。年度末に向け、残り2回の課会で入力内容を検討し、次年度に引き継ぐ予定である。	B		・年間通しての振り返りを行い、来年度に生かしていく。また、今年度の流れを踏まえて来年度はより早めに各業務の準備に取りかかれるようにしていきたい。 ・来年度は1つの業務に複数人で関わり、翌年度以降に課員や担当者が変わってもスムーズに業務が進むようにしていきたい。
	厚生 ①	・4つの係、1つの室のそれぞれの職務が正常に機能し、協力し合い業務の平準化を図る。	・それぞれの業務を、複数名が担当し進めることができ、実際に分担し作業を行った。	・生徒健康診断、文化祭PTAバザーや新入生を受け入れる準備など中心となる教員の指示で組織的に進めていくことができた。	A	・定期的な課会議等を通して、課全体の動きを課内の教員間で認識でき、今後、主担当の教員が担当替えになっても対応し、業務の遂行につなげて行けるようになったと思う。	A		・核となる教員が中心となり業務を進めることになり、引き続き、複数の教員で組織的に業務を進めてゆくように心がけて行きたい。